



特報 特報

●広々としたビニールハウス内で農作業をする就労者。豊前市番掛町の「わくはびねず農園あいち青房ファーム」で和田社長(左)と吉田市長(右)が話している。

貸農園 障害者が農作業

長久手市内で障害者の雇用につなげようと、就労支援事業会社「エスプールプラス」(東京)が来春、同市茨ヶ畑間に、企業向け貸農園「わくはびねず農園」を開く。同社初の農園は豊明市に二〇一六年に開設され、すでに百人以上が働いており、この地域で就労の場がさらに拡大されると期待が高まる。(西川侑里)

長久手市、支援会社と協定



同社の事業は、協定を結んだ自治体内にビニールハウス農園をつくり、障害者の雇用を希望する企業に貸し出す仕組み。採用の手助けや適性を確かめる体験就労、就労後のフォローも同社が担っている。障害者雇用促進法により企業には法定雇用率(現在2・2%)が定められている。一九九年度の達成率は全国で48%、県内では46・2%になっている。同社は全国に二十二カ所まで農園を増やし、二百九十社が利用。主に知的・精神障害者が約千七百八人働いている。同市番掛町にある約一万一千八百平方メートルの農園には、三十八棟のビニールハウスが並び、中にはブロックコーやニンジンが、細長いレインと呼ばれる土壌で育てられている。一枚丸ごとやレインごとに県内を中心とする二十一企業が借りており、百十四人の障害者が就労。そのうちの一人、同市内に工場があ

来春開園 企業が借り、雇用など管理

る電気機器メーカーの社員国領愛さん(左)＝同市＝は、三年前、以前働いていた市内の就労支援事業所からの紹介で就職。週五回、一日六時間、種まきや水やり、肥料やりといった作業に励む。農園の管理者として働く同市の青木真弓さん(右)は国領さんについて「じっくり取り組むのが得意。虫を取るのがすごく上手で、成長を見ているのが楽しい」と話す。給料は各社が支給。国領さんの会社は本人が育てた野菜も支給することがあり、一部は、同社の工場に従業員向けに売られている。エスプールプラスは、長久手市や近郊で障害者の「働きたい」という声を把握し、進出した。建設予定の農園は、約一万平方メートル。七十五人の障害者と、管理者二十五人の就労が可能になる。同市によると市内では約千七百人が障害者手帳を持っており「市民一人一人に居場所と役割を持ってほしい」という市の方針と一致し、協定を結んだ。今月、同社との協定締結式で、吉田一平市長は「コロナ禍でみんな大変な中、働く場所が増えることに期待したい」と抱負。同社の和田一紀社長は「じっくり構想を練りながら、長く楽しく働ける環境をつくっていききたい」と話していた。同社は、順次農園を借りる企業を探し、年末ごろから農園で働きたい障害者を募っていく。

※掲載許可済み